

退職のご挨拶



生農業経済学科・農業史

大栗 行昭

1983年5月に助手として農学部採用され3月まで、39年11か月お世話になりました。採用時は修士課程を終了したばかりでしたから、文字どおり農学部にて育ていただきました。80年代・90年代当時の先生方、事務官の方々、学生の皆さまのことが懐かしく思い出されます。また、折々に同窓の皆さまからご指導を頂いたことも忘れられません。厚くお礼申し上げます。

農業史の講義を中心に教育に当たりましたが、興味を引くようなものではなかったでしょう。加えて恩師・笠井恭悦先生のような度量の大きさは持ち合わせておらず、性格の未熟さゆえに卒業生の皆さまに色々とお迷惑をお掛けしましたこと、お詫び申し上げます。

取り組めた研究テーマは大きく2つでした。1つは日本地主制の展開と構造に関わる研究です。戦後農地改革で解体された日本地主制の「生涯」を、小作争議展開の地域性と在村中小地主経営の展開との2つの観点で跡付けたもので、通説とされた戦前期における日本地主制の後退は、地域性と階層性（西日本と大地主では顕著）を伴う、限定的なものであったと論じました。もう1つは、近代日本のいえとむらにとって、土地を買い戻すことの本質は何か、それがどう展開したかを問う研究です。明治期、地主が土地を買い入れる際、後で買い戻せるとする契約が各地で確認できたことが発端となりました。売り渡した土地を買い戻す契約が、利子を取ることを目的とした貸借である売渡担保と、買戻し特約を付けた売買の二様であったことに、ようやくたどり着きました（近刊論文「近代日本の農民・農村と土地の買戻し」）。40年間で明らかにできた範囲は広くありません。しかし、各地の農業・農村の問題の多様性を過去の資料や文献により認識できて、成果が文字として残る仕事に就けたことに感謝するばかりです。

同窓の皆さまのご健康とご活躍を心からお祈り申し上げます。退職のごあいさつと致します。

新任教員のご挨拶



福田 竜一

所属・職種：農学部 農業経済学科
准教授

専門：農産物貿易論・農村開発論

農業経済学科を卒業後、農林水産省農業総合研究所（現・農林水産政策研究所）に入所し、以来、一貫して農業・農村の社会科学的研究に取り組んでまいりました。専門分野は農産物貿易論と農村開発論です。前者の研究では、2009年に東北大学大学院農学研究科にて博士号（農学）を取得しました。

研究当時は、2001年に開始されたWTO（世界貿易機関）のドーハ・ラウンドが、先進国と途上国との対立の先鋭化によって交渉妥結の見通しが立たない状況にありました。そうした中、アメリカやEUなど主要各国は交渉の軸をFTA（自由貿易協定）に移していました。FTAでは、締結国間の関税を原則完全撤廃するルールがあるため、農産物輸出大国でありながら自国農業を手厚く保護するアメリカやEUは、FTA推進と農業保護との両立が課題でした。研究では、主要各国のFTA交渉を対象にその交渉過程において農産物貿易問題がいかに発生し、そして調整されたのかをゲーム理論や一般均衡モデルを用いて分析し、FTA締結の成功要因とその限界を明らかにしました。

他方、農村開発論の研究では、我が国の農山村の持続的発展に向けた課題に取り組みました。急激な人口減少と著しい高齢化の進む農山村では、小中学校、商店や金融機関、病院や診療所といった重要な生活インフラが相次いで撤退しており、集落の住民同士による共同作業や相互扶助機能が失われつつあるなど、地域社会の将来の存続が危ぶまれています。そのような中、住民自ら地域課題の解決に取り組む「地域運営組織」を設立する事例がいま全国的に増加しています。研究では、全国の地域運営組織の現地調査を実施し、それら取組がいかなる理由で成功しているのか、またどのような政策的支援が効果的かの解明などに取り組まれました。

宇都宮大学では、農業・農村の直面する課題の解決に向けた研究に、これまで以上に一生懸命取り組んでまいります。皆様のご指導とご鞭撻をよろしく願いいたします。